

ポータブルトレットシアター 2023

◎前説

舞台袖から菅原が登場。

作 菅原直樹

◎登場人物

岡田忠雄 岡谷
菅原直樹 柏原
竹上康成
竹上沙世 春江
申瑞季 演出家

菅原「本日はO:BokeShi『ポータブルトレットシアター』にご来場いただきまして、誠にありがとうございます。劇団を主宰している、菅原です。

O:BokeShiというのは、オー、アイ、ビー、オー、ケー、ケー、イー、エス、エイチ、アイと書いて、オイボクシと読むのですが、字面を見ると『なんじゃこりゃ』と思う方も多いのではないかと思います。しかし、意味がわかれば、比較的覚えやすい名前なんじゃないかなと思っっています。意味は『老い』と『ぼけ』と『死』です。

『老い』『ぼけ』『死』というのは、やはり辛い、悲しい、重い、といったマイナスのイメージがあると思います。できれば老いたくないし、できればぼけたくないし、できれば死にたくない。僕もそう思っていました。

しかし、20代の終わりに老人ホームで介護職として働くようになってから、考えが変わりました。それまで千葉で生活をしていたのですが、岡山への移住、さらにはその地で劇団を立ち上げるなど、以前よりも増してよりよく生きようという気持ちが出てきたんですね。

つまり、世間では『老い』『ぼけ』『死』から目を背けた

がる風潮があると思うんですが、実は向き合うことによって、前向きになれることもあるのではないかと。と。僕が老人ホームで見た老いの豊かな世界を、演劇などの芸術活動を通じて、地域に発信することができたかな、と思いました。そして、ゆくゆくは、地域で『老い』『ぼけ』『死』を隔離するのではなく、演劇などの芸術活動を通じて受け入れる文化を創出するお手伝いができたらと思っています。

Oibokeshiは、9年前に岡山県和気町で活動を始めた。一番最初に企画したのは、老いと演劇のワークショップというものです。認知症の人との関わり方に演劇的手法を活かす、といった内容で、実際に参加者に簡単な演技を体験してもらいました。

そのワークショップが一番乗りでやってきたのが、あるおじいさんでした。あまりにも早くやってきたので、僕は、その会場の一階が図書館になっていたので、図書館のお客さんが間違って上の階にのぼって来てしまったのかなと思ったんですね。『図書館は一階ですよ』と案内しようと思ったら、僕の顔を見て『あなたが菅原さんですか、新聞で見るよりいい男じゃが』って言ってきたんですね。話を聞くと、年齢は88歳。同い年の妻が認知症を患っている。新聞の告知の記事を読んで岡山市から和気町まで電車とバスを乗り継いで1時間半かけて来

た、と言うんですね。

僕は話を聞きながら、このおじいさん、ワークショップに参加するのは難しいかな、と思ったんですね。というのも、歩く姿が辛そうだったし、耳が遠くてコミュニケーションが難しいなと感じたんですね。

だから、それとなく見学を勧めたんですが、おじいさん、自分の話を延々と続けて、全く聞く耳を持たないんですね。じゃあ、もう参加してくださいってということで、参加してもらいました。

ワークショップの最後には、グループに分かれて寸劇の発表があるのですが、その場にいた全員が驚いてしまったんですね。

このおじいさん、演技をやらせたら、まさに水を得た魚だったんですね。とても生き生きと演技をする。さっきまで耳が遠かったはずなのに、芝居を始めるといきなり耳がよくなるんですね。どっちを演じているの？ と思いました。

ワークショップが終わってから、あなた一体何者なんですか？ と尋ねたら、昔から芸事が好きで、定年退職後は憧れの映画俳優を目指して、数々のオーディションを受けてきた、っていうんですね。実は、一番演技経験がある人だったんですね。

ワークショップが終わってから、僕はこのおじいさんの

ことが忘れられなかったんですね。認知症の奥さんを介護していて、演技が大好き。まさに老いと演劇を体現している人だなと思いました。どうにかしてこのおじいさんの電話番号を入手して、電話をかけました。そしたらおじいさんは開口一番でこう言ったんですね。

『これはオーディションに受かったということですか』
これが、O.B.O.K.E.S.E.N.の看板俳優の岡田忠雄さんとの出会いです。ワークショップの一番乗りの参加者だったんですね。

それから9年経って、岡田さんは97歳になって、これまでに10本以上の芝居を作ってきました。まさかこんな展開になるとは思ってもいなかったです。

出会った当時、僕は岡田さんを『おじいさん』だと思っていたので、出演シーンやセリフを少なくして、無理をさせてはいけない、と書いていました。これからどんどんできることは少なくなっていく、だから早く、今のうちにいろいろやらなさいといけないな、と。

しかし、そんな僕の予想に反して、岡田さんは年々舞台の上でできることが増えていったんですね。90歳を越してから、二時間出さずぱり、喋りっぱなしの役を演じてもらいました。また、この『ポーターブルトイレットシアター』は熊本、高知、東京、横浜と旅公演を行なっています。もう、僕らの認識は『おじいさん』ではなく、

歴とした『芝居仲間』なんですね。

とは言っても、日常生活では、当たり前前にできないことは増えていっています。足が悪くなって、近所のスーパーに行くことができなくなって、現在は介護サービスを利用しています。

そんな岡田さんなんですけども、不思議なことに舞台の上では、できることがどんどん増えていく。今日はそんなミラクルをみなさんに目撃してもらえたらと思っています。

それでは、前説はこら辺にして、今日の主役の岡田さんを舞台に呼びたいと思います。岡田さーんー！

岡田、舞台に登場。

岡田「皆さん、おかじいです。本日はご来場いただき、ありがとうございます」

岡田、お辞儀。

菅原「岡田さんとの芝居づくりも10年目です。色々ありましたが、あつという間でしたね」

岡田「(これまでの活動についてコメント)」

岡田の話が長くなる。

菅原「ちよつと、岡田さん、ストップ。岡田さんはお友達

から『二時間』というあだ名をつけられているんですね。

岡田さんから電話がかかってきたら、二時間延々としゃべり続けるからです。『あ、また二時間から電話がかかってきた』っていう感じで。まあ、それくらいのおしゃべりなんですよ

岡田「そうなんです。喋り出したら止まらないんです」

菅原「あんまり前説を長々と続けると、芝居をする時間がなくなってしまうので、そろそろ芝居の準備をしましょうか」

岡田「もうちよつといいじゃないですか」

菅原「いやいや、今日はお客さん、芝居を観にきていますから」

岡田「そんなにいらいらしなさんな」

菅原「もつと喋りたいと思うんですけど、その欲求は、演技をすることで満たしてください。」

(観客に)今回の『ポータブルトレットシアター』は、

岡田さんの魅力全開の舞台になっています。というのも、

岡田さんの介護経験をそのまま舞台化した作品なんです。だから、基本的にセリフ覚えはありません。岡田さんは家で奥さんを介護していた時のことを思い出して、それを再現してください。今日はもう岡田さん好きなようにやってもらって大丈夫です」

岡田「監督、好きなようにやってもいいの？」

菅原「はい、いいですよ。ただ、終演時間は決まっているので、あまりにも話が長過ぎたら中断しますけどね」

岡田「監督、わしね、やってみたかったことがあるの」

菅原「お、なんですか」

岡田「好きなようにやってもいいんでしょう。実はわしね、お客さんと演じてみたいの」

菅原「……あー、お客さんですか」

岡田「お客さんの中にもね、絶対、自分も舞台に立ちたいと思っている人がいるはずなんですよ」

菅原「……そうですかね。だって、今日は多くの方は、舞台を観るつもりで来られていると思うんですけど」

岡田「それはわかってる！ でもね、舞台に出たくてうずうずしている人がいるんです。何人もいますよ」

菅原「あ、何人もいるんですか。え、岡田さん、わかるんですか？」

岡田「わかりますよ。わからないんですか？」

菅原「……はい、わからないですね」

岡田「あなた、監督なんでしょう？」

菅原「まあ、いちおう。岡田さん、出たくてうずうずしている方ってどの方ですか？」

岡田「あ、指名していいんですか？」

菅原「はい。それで、その方が出たくない、と言ったら、これはおしまいにしましょう」

岡田「いいですよ。何人選んでいいの？」

菅原「一名です」

岡田「少ない！ ケチな監督だな」

岡田、客席の方に歩いていく。

岡田、何名か客いじりをした後、竹上康成と竹上

沙世の前へ行く。

岡田「あの方だ」

菅原「え、どの方ですか」

岡田「あの、おっさんのような、青年のような、」

菅原、客席に降りていく。

菅原「えーと、こちらの方」

岡田「そう、その方！」

竹上「ええ」

菅原「すみません、ちょっと、よろしいでしょうか」

竹上「あ、はい」

菅原「えーと、今日はどちらから」

竹上「倉敷です」

菅原「そうですね。あの、ちょっと、おじいさんがいろいろ無理を言っているんですが、一緒にお芝居をしていたらくことは可能でしょうか？」

竹上「いや、すみません、勘弁してください」

菅原「そうですね。ダメですよ」

竹上「(隣に座っている沙世を指して) こちらは演劇経験はあるんですけど」

沙世「いやいや」

菅原「え、あるんですか？」

沙世「……ちよっとだけ」

菅原「おお。岡山ですか？」

沙世「東京で」

菅原「そうでしたか。えっと、今日はお二人で」

竹上「はい、娘です」

菅原「ああ、親子で。ありがとうございます。ちょっと、お待ちください」

菅原、舞台の岡田の元へ。

菅原「岡田さん、岡田さん」

岡田「どう？ 出てくれるって？」

菅原「あちらの方ね、今日、親子で来られたそうで」

岡田「親子でいらっしやったの」

菅原「で、娘さんは演劇経験があるみたいですよ」

岡田「ああ、そしたらお二人、カモーン、カモーン」

菅原、竹上と沙世の元へ。

菅原「いきなり舞台上に上がれと言われてもあれですよ」

竹上「そうですね」

菅原「そしたら、…ちょっとだけ、介護だと思って」

竹上と沙世、二人で相談する。

竹上「…：…わかりました」

菅原「おー、ありがとうございます」

竹上と沙世、舞台上上がる。

岡田「いやあ、ありがとうございます。親子でいらっしやっ

たんですね」

竹上「はい」

岡田「娘さん、いやあ、あなた素晴らしい目をしてるね。あ

ら、お父さんも同じだ」

菅原「あの、お名前をよろしいでしょうか？」

竹上「竹上康成です」

岡田「竹上さん」

沙世「娘の沙世です」

岡田「さよさん」

沙世「はい」

竹上（岡田に）私ね、あなたの大ファンなんです」

岡田「いや、そんな、」

竹上「テレビでよく拝見しています。奥さんのことを介護されて、それに舞台にも出られて、とても頑張られているなと思って。いつも元気をもらっています」

岡田「いやいや」

竹上「実は、私の家内も認知症なんですよ」

岡田「あ、そうですか。奥さんが」

竹上「はい」

岡田「私はね、妻を10年以上介護して、昨年12月に亡くしたんです」

竹上「…：…ああ。そしたらお寂しくなりましたね」

岡田「竹上さんとおっしゃったね。竹上さん、あとで悔いがないように、奥さんをしっかりと見てあげてください」

竹上「…：…ありがとうございます」

竹上と岡田、握手をする。

菅原「そしたら、岡田さん、お二人に協力していただいて、お芝居をやっていきましょようか」

竹上「私はちょっと無理ですよ」

菅原「そしたら沙世さんお願いしてもよろしいですか？」

沙世「え、……何をやるんですか？」

菅原「この舞台は、岡田さんの介護経験をそのまま舞台にした作品でして、あの、沙世さん、岡田さんの奥さんの役を演じていただいてもよろしいでしょうか」

沙世「奥さんの役ですか？」

岡田「監督、ちょっと、こんな若い方にはあさんの役を、」

菅原「いや、あの、大丈夫です。いい考えがあるので」

沙世「はあ」

菅原「そしたら、沙世さん、こちらに来ていただけますか。これが場面設定なので、ちょっと目を通しておいください(プリントを渡す)」

沙世「……はい」

沙世、菅原、舞台上手へ。

菅原「ここは、岡田さん演じる、岡谷正雄の家。こっちが、岡谷正雄の妻、岡谷春江の部屋。あっちが台所です。沙世さんは、別に高齢の女性を演じる必要はありません。ぼくらは普段の自分に近い役を演じるので、沙世さんも

普段の自分に近い役を演じてください。普段何かされていることありますか？」

沙世「え」

菅原「お仕事でも遊びでも何でもいいんですが」

沙世「……ボーリング場で働いています」

菅原「そうですね、そしたらそれを演じてください」

沙世「え」

菅原「あとは、どうにかなると思います」

沙世「いや、」

菅原「大丈夫です。全然かみ合わなくても大丈夫です。むしろかみ合わない方が面白いですから」

沙世「はあ」

菅原「で、お父さん、康成さんは、いったん、客席でご覧いだいて、なんか出れそうだな、と思ったら、出ていだいて」

竹上「いやいや」

菅原「それも出づらいですよね」

竹上「出ないでいいです」

菅原「いや、なんか、出れそうだったら、声をかけますので」

竹上「いや、いいですよ、そんな」

菅原「一応、これお渡ししますので目を通しておいください(プリントを渡す)」

竹上「はあ」

竹上は客席に戻る。

菅原「もしたら岡田さん、やりましようか」

岡田「即興でいいんですね」

菅原「はい、いつも通りで。もしたら岡田さん、奥さんの介護といたら、何をしていましたか？」

岡田「ばあさんの昼飯を作っていましたね」

菅原「わかりました。奥さんの昼ごはんを作っているところからはじめましょう。沙世さん、準備はよろしいでしょうか」

沙世「あ、はい」

菅原、カチンコを持つ。

菅原「それでは、『ポータブルトイレットシアター』はじまります。よーい、スタート！」

菅原、カチンコを鳴らす。

◎第一幕：岡谷家の日常

台所と春江の部屋の、二部屋。

春江の部屋では、春江（沙世）が椅子に座っている。

台所では、岡谷（岡田）が昼食のカレーを皿によそっている。

そこにケアマネージャーの柏原（菅原）が玄関を開けて入ってくる。

柏原「こんにちは」

岡谷「……（聞こえてない）」

柏原「こんにちは！」

岡谷「ありや、あ、マネージャー。珍しいですね、マネージャーが来るなんて」

柏原「ちよつと、今日、ヘルパーの森さんが子供の行事でお休みなんですよ」

岡谷「あ、そうですか。確か小学生の息子さんがおったな」

柏原「はい、そうなんですよ。それと、奥さんの最近の様子も聞きたくて」

岡谷「あ、そうですか。どうぞ、入ってください」

柏原「お邪魔します」

柏原、台所に入るなり、

柏原「カレーですか？」

岡谷「あ、わかる？」

柏原「おいしそうな匂いがしてますよ」

岡谷「今日な、ばあさんに『なに食う？』って聞いたら、『カレー』って言いよるんよ」

柏原「それでカレーを作っただけですか。素晴らしいですね」

岡谷「いやいや、カレーは簡単じゃから。あ、マネージャー食べてく？」

柏原「いや、あの、会議が入ってて」

岡谷「え？」

柏原「いや、いただきますんですが、この後も会議が入ってて」

岡谷「でも、ちょっと食べていかれ。作りすぎた。わしとばあさんじゃ食べきれん」

柏原「いや、大丈夫です、はい」

岡谷「もしかして、じいさんが作ったカレーが不潔だと思うんじゃないろう？」

柏原「いや、そんなことないんです。岡谷さんのこと、不潔だなんて思ったことありませんよ。岡谷さん、社会の窓

が開きっぱなしですけど、不潔だなんて」

岡谷「え」

岡谷、ズボンを確認する。

岡谷「ありゃー」

岡谷、慌ててズボンのチャックを閉める。

岡谷「歳をとると社会の窓が開くようになったるんよ」

柏原「…。時間があればゆっくり食べたいんですけどね」

柏原、カレーライスに近づき、

柏原「うわぁ、おいしそう」

岡谷「だからマネージャーも食べていかれ」

柏原「いやいや、それより、あったかいうちに春江さんに出してあげてください」

岡谷「ああ。マネージャー、そこ座ってて」

柏原「はい」

柏原、台所の椅子に座る。

岡谷、カレーライスをお盆に載せて、隣の部屋へ

行く。

岡谷「はるちゃん、おいしいカレーが出来たよ」

春江「はい？」

岡谷「今日はな、お肉がたくさん入って、はるちゃんの好きなニンジンも入ってる。食べる？」

春江「いや、いいですいいです」

岡谷「あれ」

春江「いや、おじいさん、ちょっと、ここは遠慮いただいでるんです」

岡谷「はあ？ 何をご遠慮いただいでるんだ」

春江「ここはスタッフ以外立ち入り禁止なんですけど」

岡谷「立ち入り禁止。なんでわしの家なのにわしが立ち入りじゃないんだ」

春江「いや、ここはスタッフの休憩室なんで」

岡谷「わけわからんこと言うて。ほら、カレーを食べるんじゃない」

春江「いや、結構です」

岡谷「なにを言ってるんだよ。おれがさっき『パンにする？ ご飯にする？』言うたら、『カレー』って言うたじゃねえかよ」

春江「いや、そんなこと言ってないです。誰かと間違えてるんじゃないですか」

岡谷「あんた、はるちゃんじゃろう」

春江「そうですけど……。もうちょっと、行きますね」

春江、部屋を出ようとする。

岡谷「おい、どこに行くんだ」

春江「バスケットに行くから」

岡谷「バスで行く？」

春江「バスケットボール。ちょっと、夫が迎えに来るんで」

岡谷「夫が迎えに来る？」

春江「はい」

岡谷「そしたら、わしはだれ？」

春江「……ボーリング場でいろんな人に勝手にコーチングしてくるおじいさんでしょう」

岡谷「は？」

春江「すみません、急いでいるんで」

岡谷「(春江を突く)いい加減にしやがれ！」

春江「ちょっと、ドンとしないでください」

岡谷「このクソババア」

春江「はあ、クソババアって。ちょっと、もうやめてくださいー！」

岡谷、春江の腕をつかむ。

春江「離してください」

そこに柏原が入ってくる。

柏原「岡谷さん！ ストップ！ ストップ！」

岡谷「もう一発いっちゃろうか」

柏原「岡谷さん、カレーは後にしましょう。おいしかったですよ、カレー」

岡谷「え」

柏原「おいしかったですよ、カレー」

岡谷「え、食べたの」

柏原「ちよつとね、味見。味見しました。いやあ、さすがです、おいしかったです」

岡谷「おべんちゃら言うな」

柏原「いやいや、ホントですよ。春江さん、まだお腹が減ってないんですよたぶん。ちよつとしてから、ね、またちよつとしてから、カレー持ってきましたよ。あ、ぼくも一緒にカレー食べていいですか」

岡谷「え」

柏原「ちよつと、お腹減ってきちゃって。（春江に）ごめん
なさいね、大声出して」

春江「……」

岡谷と柏原は台所に戻る。

柏原「はい、座ってください」

岡谷、柏原の順で椅子に座る。

岡谷「マネージャー、これよ」

柏原「はい」

岡谷「これだけわしが頑張っしてしよるのにね、わしの気持ち
がわからんのかと思うと情けない」

岡谷、泣く。

柏原「……本当に大変ですね。自分の生活も大変なのに、奥
さんを介護されて。岡谷さんは本当にがんばっておられ
るなと思います。いや、素晴らしいです」

岡谷「素晴らしいわけあるか」

柏原「いや、あのね、奥さんも感謝していると思いますよ」

岡谷「感謝していたらあんなことは言わない」

柏原「いや、でも、なんというかね、深いところでは感謝し
てますよ」

岡谷「感謝しているところを見たことがあるんか？」

柏原「……いや、それは」

岡谷「マネージャー、あなたにはわからん。これは経験したものにしかわからないんだ」

柏原「……いや、僕はね、お二人の姿からいろいろ学ばせていただいています。いや、なんというか、これが人生か、と」

岡谷「これが人生？ わしの人生は春江のせいで無茶苦茶なんだよ！」

柏原「……」

菅原、突然、カチンコを鳴らす。

菅原「止めます。すみません。(客席に向かって)竹上さん」

竹上「……はい」

菅原「ちよつと思いつきですけど、竹上さん、ここで僕の役と代わっていただけますか？」

竹上「え」

菅原「なんか、岡谷さんの気持ちを聞いてあげたいんですけど、なかなかうまくいかないの……。同じ経験のある竹上さんだったらまた違うのかなと思って」

竹上「ああ。……私がケアマネージャーの役をするということですか？」

菅原「そうですね。あ、もしたら、マネージャーの役を変え

ましようか。今まで、マネージャーでしたけど、近所の竹上さんっていう設定で」

竹上「ああ」

菅原「そっちの方が演じやすいですよね」

竹上「まあ、そうですね。近所の人に来て岡田さんのお話を聞いてあげるとどう感じですか？」

菅原「そうですね。よろしいですか？」

竹上「……あ、はい」

菅原「ありがとうございます！ もししたら、岡田さん、竹上さんに僕の役を演じてもらおうと思います」

岡田「え、あ、竹上さんが出てくれるの？ それはいいですねえ」

菅原「今までは岡谷の家にケアマネージャーの柏原がやってきたという設定でしたが、近所の竹上さんがやってきたという設定に変えようと思います」

岡谷「わかりました」

菅原「登場人物は変わりますが、大まかなストーリーは同じです。竹上さん、それに書いてあるストーリーはなんとく目を通していただけましたか？」

竹上「まあ、いちおう」

菅原「もしたらお願いします」

竹上「……はい」

竹上、舞台上に上がる。

菅原「わからないことなどあったら、僕がここからサポートしますので」

竹上「わかりました」

菅原「じゃ行きます。岡田さん、春江の部屋から戻ってくる
ところから始めます」

岡田「はい、わかりました」

菅原「それでは、よいい、スタート！」

菅原はカチンコを鳴らして、舞台袖へ。

岡谷「竹上さん、これよ。これだけわしが頑張っ
てしよるのにね、わしの気持ち
がわからんのかと思うと、もう情けない」

岡谷、泣く。

竹上「うちもおんなじなんよ。岡谷さんの苦
労がわかるよ」

竹上、自身の介護エピソードを話す。

岡谷「ありや、奥さんも同じようなことがあ
ったの」

竹上「そうじゃ」

岡谷「さっきのケアマネージャーはな、これが
人生だ、なんて簡単なことを言う。全然わ
かつたらん」

竹上「そうじゃそうじゃ、これは経験したも
んしかわからん。岡谷さんはよう頑張
るとる」

岡谷「もうわしはな、これ以上頑張れるかど
うかわからんよ」

竹上「岡谷さん、奥さんを奥さんと思わ
ずにな、他の者がうつっていると思
った方がええ。あれは他の人なんよ。本
当の奥さんは別のところについて岡谷
さんのことが大好き。今はな、別の
人がうつってるんよ」

岡谷「あれは別の人なのか」

竹上「そう。そう思わないとやってられ
ん」

岡谷「そうか、そう思わないといけ
ないのか。竹上さん、ありがとうな」

と、そのとき、春江が部屋から出てくる。

竹上「あ」

春江「おつかれさまです」

竹上「お、おつかれさま」

春江「お先に失礼します」

岡谷「なにしょんなら」

竹上「(岡谷に)岡谷さん、ここは私が。(春江に)あのー、もう少し待ってもらえるかな」

春江「え」

竹上「えっと、あの、……渡したいものがある」

春江「なんですか」

竹上「いや、あの、いま準備してるんだけど」

春江「急いでるんですけど」

竹上「ほら、給料明細」

春江「え」

竹上「給料明細、まだ渡してなかったでしょ」

春江「……ああ」

竹上「まだ渡してないんだよ。ちょっと、急いでるときに悪いんだけど」

春江「えー」

竹上「ごめん、すぐ用意するから」

春江「……わかりました。(岡谷を気にしながら)あの、ちょっといいですか？」

竹上「なに」

春江「(小さい声で)あのおじいちゃん、さっき私に掴みかかってきたんですよ、すごい力で」

竹上「ああ、そう？」

春江「マジありえないですよ」

竹上「そうだねえ、ごめんね、ちょっと、おじいさんも混乱

しちゃったみたいで」

春江「いや、でも、普通の女の子だったらトラウマになると思います」

竹上「そうだね。それは、ちょっと、注意します」

春江「お願いします」

竹上「あのおじいちゃんね、97歳なんだって」

春江「え、そんなになるんですか」

竹上「耳も聞こえないし、話も長いし、いろいろ大変だと思っうけど、まあ、地域のボランティアをするつもりで、」

春江「……わかりました」

竹上「そしたら、今用意してるんで、もう少し待ってもらえる？ あ、そうだ、空いているレーンで遊んでもいいから」

春江「あ、そうですか。わかりました」

春江、部屋の中に戻る。

岡谷「ありゃー。マネージャー、なにしたの？」

竹上「岡谷さんな、店長を演じたの。ボーリング場の店長」

岡谷「ボーリング場の店長」

竹上「さっきの岡谷さんとのやりとりを見てて、もしかして、って思ったんですよ。春江さんな、ここをボーリング場だと勘違いしてるんですよ」

岡谷「……ここをボーリング場」

竹上「岡谷さん、演じることもええよ」

岡谷「演じること」

竹上「あのな、認知症の人は見当識障害っていうのがあるんじゃない。要は、いまがいつで、ここがどこで、目の前にいる人が誰なのか、わからなくなってくる。同じ空間にしながら別々の世界を見てしまっていることがあるの。だから、春江さんが見ている世界を否定したら、怒る。春江さんが見ている世界を肯定すれば、怒らない」

岡谷「うーん」

竹上「肯定する。つまり、演じる」

岡谷「演じる」

竹上「そう。春江さんが見ている世界を想像してな、役を演じてその世界に飛び込んでみる」

岡谷「……んん」

竹上「私もな、妻を相手に演技するのはなかなかできんかった。そもそも受け入れられなかったからな。でもな、いろいろ勉強して、妻の気持ちをちゃんと受け止めることが大切なんだって気づいたんよ。受け止めるためにはな、演技が必要なんじゃ」

岡谷「……なるほど」

竹上「岡谷さん、演技得意じゃろう？」

岡谷「ありゃよく知ってるなあ」

竹上「前に聞いたよ、今村昌平監督の映画に出演したことがあるって」

岡谷「そうですよ」

竹上「あれはオーディションを受けたの？」

岡谷、黒い雨について話を始める。

同時に春江は休憩室を出て、レーンに向かう。ボールを持って投げ始める。

岡谷、その姿を見て、

岡谷「ありや、今のフォーム、素晴らしい」

竹上「おー、ストライク」

春江「やったー」

岡谷「あなた、今のフォーム、素晴らしい。驚いた！」

春江「あ、ありがとうございます」

竹上「このおじいちゃんな、昔、プロボウラーだったんよ」

春江「え、そうだったんですか」

竹上「(岡谷に)プロボウラーでしたよね」

岡谷「そうですよ、わしはね、ボウリングブームの火付け役なんです。中山律子を育てたのはわし」

春江「えーすごい」

岡谷「いや、あなた、いい選手になる」

竹上「このおじいさんはおべんちゃらは絶対に言わない」

岡谷「おべんちゃらは言わない。わしはね、人を見る目はあるの」

春江「そんなすごい方だったんですね」

竹上「すごい人なのよ。あ、そうそう、さっき夫の、あの、

正雄さんから電話があつて、渋滞で遅れてるみたいで、

『もうちょっと待ってて』って」

春江「あ、そうですか」

竹上「携帯持ってないでしょ」

春江「携帯」

竹上「電話つながらないから、こっちに電話してきた」

春江「そうですか」

竹上「ゆっくりしてなよ。ジュース持ってくるから」

春江「あ、ありがとうございます」

春江、部屋に戻る。

竹上、春江が部屋に入ったのを見て、岡谷に拍手。

竹上「岡谷さん、すごい、素晴らしい演技！」

岡谷「え、そうですか」

竹上「元プロボウラーになった。いやー、岡谷さんの演技

もっと見てみたいな。もしかして、岡谷さん、いまもお

芝居とか興味ありますか？」

岡谷「もちろん、ありますよ」

竹上「あ、そしたらね、今日いいの持ってきた」

と、カバンからチラシを取り出す。

竹上「これ」

岡谷「(チラシを読む)なんですかこれ」

竹上「これね、今度、岡山市で元タカラヅカの演出家を招いて市民劇を作るんじゃないかって。で、オーディションがあるの」

岡谷「お、いいですねえ。タカラヅカか」

竹上「実はね、妻の介護するようになってからね、私、演劇に興味を持つようになったんですよ」

岡谷「ありゃあ、驚いた。竹上さん、あんた演劇に興味があるのか」

竹上「でも、観るのはいいけど、さすがにやるのはなあ、と
思っ。岡谷さん、これ、どう？」

岡谷「いいですよ。竹上さんも受けましょう」

竹上「でもな、演目が『ロミオとジュリエット』なんよ」

岡谷「『ロミオとジュリエット』というたら、あのあの、有名な劇作家の」

竹上「そうです、シェークスピアの」

岡谷「ああ、シェークスピア。でも、ロミオとジュリエットって、わしみたいなじいさんができる役があるんです

か？」

竹上「それなんよ。でも、岡谷さん、ロミオいいかもしれん」

岡谷「なに言ってるんですか、竹上さん。こんなじいさんが
やったらおかしいじゃないですか」

竹上「いやいや、岡谷さん、面白いかもしれないですよ。だ
って身体は老い衰えるけど、心は老い衰えないでしょう」

岡谷「はあ」

竹上「春江さんもそう。心は20代なんだから」

岡谷「うーん」

竹上「岡谷さんならできるよ！」

岡谷「……竹上さん、あなたも受けるんですよ」

竹上「……いや、それは、」

岡谷「ダメです！一緒に受けましょう。いいですか」

竹上「……わかりました。岡谷さんが行くんだったら、僕も
やる」

岡谷「いいですね。楽しくなってきましたね。二人で行きま
しょう！」

暗転。

◎第二幕：オーディション

オーディション会場。

四脚の椅子。演出家と演出助手の二脚の椅子が並び、向かいに一脚と、付き添い人用の一脚。

舞台には演出助手役の菅原がいる。

菅原、下手へ行き、

菅原「次の方、どうぞー」

岡谷「はい！」

竹上「岡谷さん、どうぞー」

岡谷と竹上は下手から登場。

岡谷「失礼します。よろしくお願ひします」

竹上「あの、私は付き添いということで、同席させていただきます」

菅原「あ、はい、聞いています。そしたら、そちらにおかけください」

岡谷「あなたが監督？」

菅原「いえ、違います。監督はこの後来られます」

岡谷「ああ、そうでしょうね。この人は監督には若すぎる」

菅原「……どうぞおかけください」

岡谷、竹上、椅子に座る。

菅原「(調光室に向かって) それでは準備オーケーです。よろしくお願ひします！」

照明が変わり、音楽が鳴る。

客席からスポットライトを浴びて、演出家が登場する。

そのまま舞台へ。

岡谷「おー」

と、拍手する。

演出家、椅子に座る。

演出「それでは、えーと、(応募用紙を見る) 岡谷さん」

岡谷「はい」

演出「最初に自己紹介をお願いします」

岡谷「(耳が聞こえない)」

演出「自己紹介」

岡谷「……わたくしは、岡山市から来ました岡谷正雄と申し

ます」

演出「歳は？」

岡谷「え、歳ですか。歳は……（くねくねする）恥ずかしいですけど、97歳になります」

演出「97歳ですか！ 97歳でオーディションを受けるって言ったら、周りの方々が驚いたでしょう」

岡谷「そうですね。町内の人に、今日オーディションを受けてね、おれは役者になるんだよ、って言うてきとんです。ですから、もし、これが落ちたら、ぼくはね、自殺を……」

演出「いや、それは」

竹上「岡谷さん、困るよ」

岡谷「え」

竹上「岡谷さんに元気になってもらおうと思って、オーディションのチラシを渡したんじゃないから」

岡谷「声をひそめて柏原に」竹上さん、大丈夫、ウソ。こういうこと言うておいた方がいいの」

演出「……。そしたら、岡谷さん、あなたが尊敬する人を教えていただけますか」

岡谷「尊敬する人ですか。……えーと、そうですね、仲代達矢です」

演出「おお、仲代さん。それでは今日は仲代達矢さん演技を演じていただきます」

岡谷「え、仲代達矢を！ いやー、これはちょっと、タカラヅカの先生、あれだけの名優を演じるなんて」

演出「これからの質問は仲代達矢さんになったつもりで答えてください」

岡谷「いやでも、わしが、あれだけの名優を」

演出「岡谷さん、これはオーディションですから。いいですか、岡谷さんの演技力を見ます」

岡谷「……」

演出「ここは舞台です。舞台の上でなれないものなんてない。そうでしょう？」

岡谷「……さすが、タカラヅカの演出家だな。言うことが違うわ」

演出「それでは行きます。（演出助手に）じゃ、お願い」

菅原「はい、わかりました」

菅原、カチンコを鳴らす。

演出「あ、仲代さん、こんにちは。今日はお会いできて光栄です」

岡谷「（仲代を演じて）……あ、どうも」

演出「仲代さん、これまで数えきれないほどの映画に出演されてきましたよね」

岡谷「そうだね」

演出「仲代さんが一番印象に残っている撮影のお話をお聞きしたいのですが」

岡谷「ああ。一番印象に残っている撮影ね。……雪の中でね、大平原でね、ロケをしたの。そこで、私が倒れる場面があるんです。倒れたときに雪がしんしんと降って、倒れている上に雪が積もっていく。この状態で何時間だったと思います？　いつまでたっても監督からOKが出ない。体の上に雪が積もって、人の型ができてしまってる。もう死ぬんじゃないかと思いました。でも、私は、監督のために、作品のために、必死で演じ切りました。私は、俳優にとって大切なのはそれだと思えます。演技上手下手は別として、作品に全てを捧げる意志があるかどうか。それですね」

演出「…さすが、仲代さんですね。ありがとうございます。」

(演出助手に)「はい」

菅原「カット！」

菅原、カチンコを鳴らす。

岡谷「いやー、先生、これ面白いですね」

演出「ありがとうございます。仲代さんになりきってましたね。そしたら、次は、台本を読んでもらおうかと思えます。配ってくれる？」

菅原、台本を配る。

演出「そしたら、連れてきて」

菅原「はい」

菅原、去る。

演出「お渡しした台本は『ロミオとジュリエット』です」

岡谷「ああ、これがあの有名な。竹上さん、ちょっと、眼鏡」

竹上「ああ、はい」

竹上、リュックサックから眼鏡を取り出し、岡谷はかけている眼鏡の上にさらに眼鏡をかける。

菅原、沙世を連れてくる。

演出「彼女が今回の舞台のヒロインです。彼女がジュリエット役をします」

沙世「あ、よろしくお願いします」

岡谷「(沙世の顔を見て)ありゃあ。なんかどこかで会ったことがあるような。あなた、目が美しいね」

沙世「…ありがとうございます」

沙世、岡谷の隣に座る。

演出「では、お願いします（演出助手に合図）」

菅原「ヨーイ、スタート！（カチンコを鳴らす）」

岡谷、沙世は『ロミオとジュリエット』のバルコ

ニーの場面を読み始める。

岡谷は台本の文字が小さくて読めないようで、うろ覚えのロミオのセリフを喋る。

菅原「カット！」

菅原、カチンコを鳴らす。

演出「はい、ありがとうございます。岡谷さん、おつかれ
さまでした」

岡谷「いやー、先生、やっぱりシェークスピアのセリフはわ
しには難しいですね」

演出「審査の結果が出ました」

竹上「え。岡谷さん、結果が出たそうです」

岡谷「え」

演出「岡谷さん」

岡谷「はい」

演出「…合格です」

岡谷「合格？ え、本当ですか？」

竹上「岡谷さん、すごい！」

岡谷「やったー！ 先生、ありがとうございます」

演出家と岡谷は握手する。

演出「私はあなたのロミオが見てみたい」

岡谷「ありがとうございます。命の限り、頑張ります！」

暗転。

◎第三幕：岡谷家の非日常

夕暮れ時の町。

岡谷がロミオの台詞を呟きながら歩いている。

そこに竹上がやってくる。

竹上「あ、岡谷さん。ここにおったんか。探したよ」

岡谷「あ、竹上さん」

竹上「家に行ったら玄関開けっ放しで、岡谷さんも春江さん
もいないから。どうしたの？ 春江さんは？」

岡谷「あのな、わしが二階で台本読んでたらな、その間に春江がおらんくなって探しよったんよ」

竹上「ああ、そりゃあ、大変じゃ」

岡谷「うん、徘徊」

竹上「どれくらい探しよるん？」

岡谷「……まあ、一時間はたとうな」

竹上「そうか。そしたら、ちょっと私も探してみようか」

岡谷「ああ、竹上さん、探してくれる？ ありがとう」

竹上「あと地域包括支援センターにも連絡しておこうか」

岡谷「いや、いい。こういうのはな、あんまり大げさにしたくねえが。ふうがわりい」

竹上「でもな、こういうのはお互い様じゃ。岡谷さんだけの問題じゃないんだから。まあ、ちょっと、探してみるから。岡谷さんはな、足が悪いんだから家で待ってって」

岡谷「ああ、そうか。ありがとう」

竹上「自転車に乗って探してみるわ」

岡谷「竹上さん、ありがとうな」

竹上は去る。

岡谷はまたロミオの台詞を言いながらさまよいつづける。

と、そこに春江がやってくる。

岡谷「春江、なんしょんなら」

春江「いや、バスケ行こうか思うて」

岡谷「はあ？ バスに乗る？」

春江「いや、バスケットボール」

岡谷「ああ、バスケットボールか」

春江「あれ、おじいちゃん、これからボーリング場？」

岡谷「ボーリング場？」

春江「うん」

岡谷「ああ、わしや、ボーリング場に行ってきたところ。さっきな、店長がバイト中にはるちゃんがおらんようになってたけえ、探しよったんよ。大騒ぎしよった」

春江「えー、私は仕事終わったんだけどな。これからバスケに行こうと思ってたんだけど、正雄さんとはぐれちゃってさ」

岡谷「正雄さん？」

春江「うん、夫の」

岡谷「ああ、夫の」

春江、くしゃみをする。

春江「寒いね」

岡谷「寒いな。そしたら、これ着るか」

春江「え」

岡谷、着ているはんでんを春江に着させる。

春江「ありがとう、おじいちゃん」

岡谷「正雄さんは何してるんだろうな。かわいい奥さんを置いてきぼりにして」

間。

春江「ねえ、おじいちゃん、ちょっと相談してもいいかな」

岡谷「相談？ 何？」

春江「最近、私、今みたいによく迷子になったり、よく失敗したりして、正雄さんに色々迷惑かけてんだよね。正雄さん、仕事や趣味で忙しいし、なんか、もう別れた方がいいのかなあ、って。どう思う？ 別れた方がいいかな？」

岡谷「はるちゃん、そんなこと言っちゃだめ。絶対だめ」

春江「……」

岡谷「正雄さんは、はるちゃんのこと愛しているんよ」

春江「そうかな」

岡谷「そうだよ。だって、何十年もはるちゃんと一緒に生活してきたんだから。はるちゃんなしの正雄さんなんて考えられない」

春江「え、そうかな」

岡谷「そうなの。迷惑かけるなんて、そんなのは考えないでいいの。ただおるだけでいいの。なにがあっても、正雄さんとはるちゃんは一緒におらんといけんの」

春江「本当にそう思ってるのかな」

岡谷「正雄さんは絶対に思ってる。おじいちゃんにはわかるの」

春江「…なんか、おじいちゃんも男なんだね」

岡谷「ハハハ、でもな、もう男の役には立たんのよ。これわかる？」

春江「え、なに言ってるの？」

二人、笑う。

春江「あれ、おじいちゃん、ここはどこかいな？」

岡谷「ありゃ、うーん、ここは……、ありゃあ、お城が見えるな」

春江「お城？」

岡谷「あ、そうか、ここは後楽園」

春江「後楽園？ え、本当？」

岡谷「うん、多分。わしもわからんようになった」

春江「迷子にならないでよ」

岡谷「迷子にならないよ。手をつなごうか？」

春江「うん。(岡谷の顔を見て)……あれ？」

岡谷「どうしたの？」

春江「おじいちゃん、誰だっけ」

岡谷「何言ってるの。わしは、……ロミオ」

春江「え、ロミオ」

岡谷「あなたはジュリエット」

春江「ちょっと、おじいちゃん、ぼけないでよ」

岡谷「ぼけてるんじゃない。わしはな、これから舞台に出る
んじゃ」

春江「舞台？」

岡谷「ぼくはロミオ。おお、ジュリエット」

春江「……おじいちゃん、ロマンチストだね」

音楽が流れる。

二人、仲良く手をつなぎながら歩いていく。

夕日を眺める二人。

岡谷「夕日が綺麗だね」

暗転。